

財団法人松江市教育文化振興事業団
埋蔵文化財課年報 V

平成 12 年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

北小原古墳群

調査経緯

中国セルラー電話㈱は松江市西浜佐陀町に携帯電話の無線局を建設することになり、分布調査の依頼を受けた松江市教育委員会は試掘調査を実施した。試掘調査の範囲内においては、遺構・遺物が検出されなかった。そこで、工事が開始されたところ、丘陵尾根上に石棺二基が検出され、工事施工者によって西側の石棺（北小原3号墳）が開口され石棺内より小型仿製鏡が検出・取り上げられた。

知らせを受けた松江市教育委員会と中国セルラー電話㈱との間で協議が持たれ、工事の一部変更によって東側の石棺（北小原2号墳）は現状保存に決定し、3号墳石棺については棺内の調査を行い、復元したのち保存することとなった。

調査概要

北小原2号墳は長軸11m、短軸10mの円墳、同3号墳は復元長11m、短軸9mの方墳である。4世紀の前期中規模古墳として位置付けられ、どちらも地山切り出しによって墳丘を築造している。2号墳は丘陵尾根の自然地形を利用して片面をテラス状に整形し、南西を「溝1」によって区画する。これに対し、3号墳は丘陵の高まり部分を利用して築かれたと考えられ、「溝2」の区画を有する。共に主体部は箱式石棺で主軸は2号墳が北より約54°東偏、北東から南西軸であるの対し、3号墳は北より10°西偏（頭位はS-10°E）の南北方向を指向している。

その築造時期は、石棺遺物が少なく決めにいが、裾部から出土した2つの土器棺から概ね4世紀中～後半と推定している。

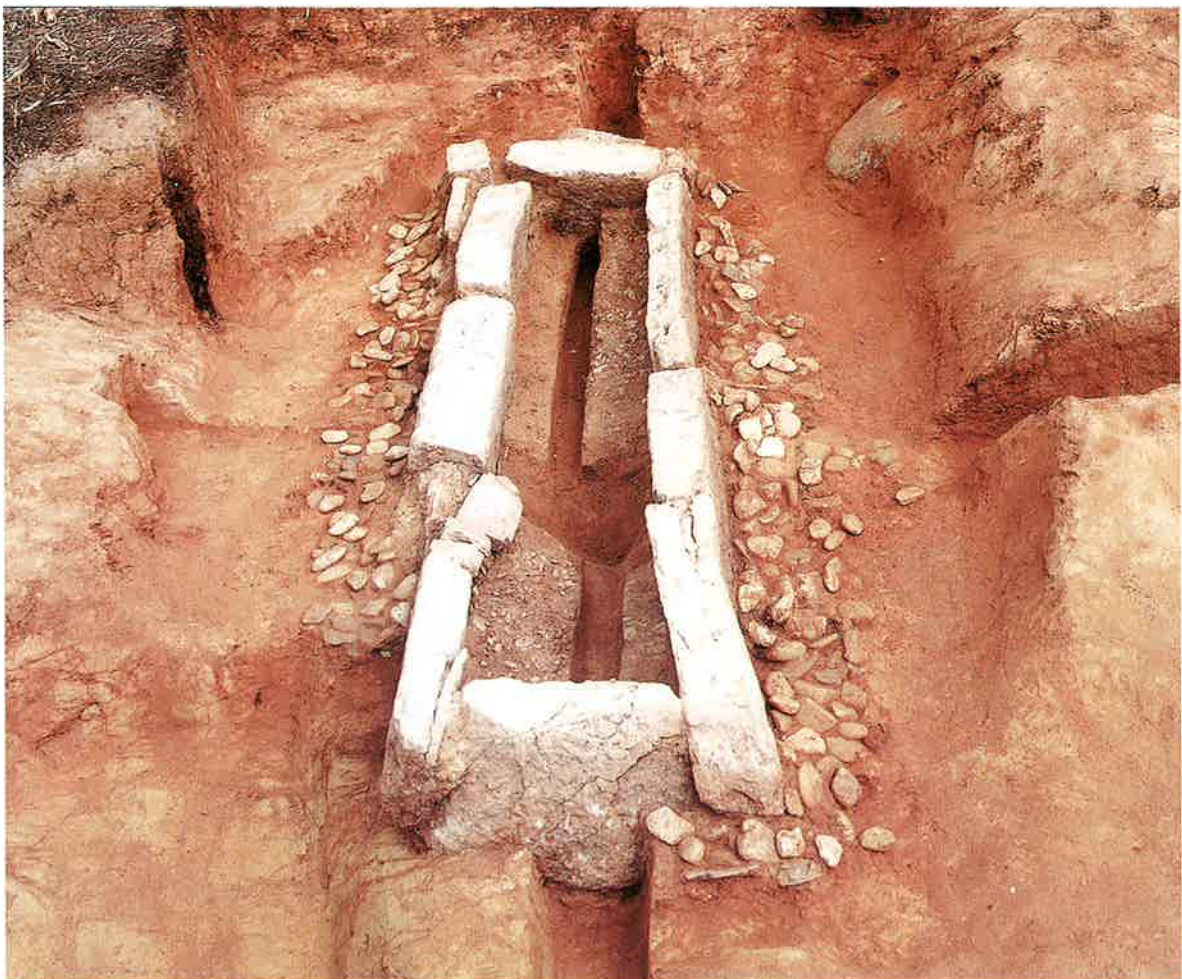


北小原2号墳・溝1（奥が3号墳）

土器棺以外には3号墳石棺より小型仿製鏡（表紙写真）が出土している。鏡式としては珠文鏡といわれるものであり、鏡背内区の文様が珠文の他に環状突起と房状突起で飾られた特異な形態であるが、4世紀代の小型仿製鏡の特質を幾つか備えている。

周辺地域でこれまで調査されたものとして北小原古墳群に近接する釜代1号墳が知られている。両古墳は本来的な地形では同丘陵上に位置し、時期的にも近似することから同一の古墳群として捕らえることができ、幾つかの共通点も見出せる。すなわち、北小原古墳群と釜代1号墳を構成しているのはいずれも古墳時代前期の径10m前後の中規模の円墳・方墳であって、面径10cm前後の小型仿製鏡を副葬している点も同じである。主体部には北小原3号墳は石棺外にも礫を敷くという入念な構造を有する礫床の箱式石棺であり、釜代1号墳は出雲地域では希少な粘土槨を有するなど、前期の中規模古墳群としては独自の位置を与えることができるであろう。そのことは即ち、古墳に埋納された首長層の立場を反映しているものと考えられる。

奈良時代の『風土記』の国引き神話で登場する「狭田国」は当地域の付近が想定されており、古墳時代中期には古曾志大谷古墳群、丹下庵古墳など大規模な古墳が形成されている。このように当地域は古代出雲の歴史の中で独特の位置を占めるに至るが、それに先立つ古墳前期の首長の奥津城として、本古墳群の重要度は極めて大であるといえるであろう。（藤原 哲）



鏡の出土した北小原3号墳箱式石棺

大坪遺跡

大坪遺跡は、松江市山代町・大草町地内に所在する。

そこは松江市東部に位置する意宇平野の西寄りの場所で、現在は水田として利用されている。調査区は真名井神社参道に沿って幅約12m、長さ約337mと南北に細長く、意宇平野西部をほぼ南北に断つ位置である。

意宇平野は、その中央よりやや西寄りの南端付近において古代に出雲国国庁が設置されたという歴史的に重要な場所であり、国庁跡付近では条里の痕跡が現在まで明瞭に残っている。『出雲国風土記』の道度の条には、「国の東の堺より、・・又西二十一里にして国庁、意宇郡家の北なる十字街に至り、即ち分かれて二つの道となる。〔一は正西の道、一は北に框れる道なり。〕」との記載があり、633年には意宇平野を東西に古代山陰道、意宇郡郡家の北方に位置する十字街から北へは隠岐国へ続く北枉道が通っていたことがわかっている。したがって、今回の発掘調査では、『出雲国風土記』に記載された「正西道」が遺構として検出できるのではないかと大きな期待がもたれた。

発掘調査は、平成11、12年度の2年度にわたって実施した。

調査の結果、現時点で最も「正西道」の可能性が高いとされている地点において、真名井神社参道



意宇平野と大坪遺跡



木簡出土状況

に関連すると思われる橋脚状の柱根を確認し、古い時代の条里界線と推察される痕跡を確認した。残念ながら「正西道」の遺構は検出できなかったが、その周辺の土層を観察したところ、今回条里界線と推定した場所の北側では、有機質を多量に包含した沼地状の堆積土を確認し、その底土付近からは木簡3点が出土した。木簡2点はそれぞれ、「恐々謹解□□□・・」、「・・延暦八年□・・」と解読でき、字体および延暦八年（西暦789年）という年号から奈良時代の木簡であることが判明した。どういう理由か、「正西道」に推定される条里界線に北接する沼地状土層から、奈良時代の木簡3点が出土したということは非常に興味深い事実といえよう。

調査では、地質的な側面もふまえて大きな視点から意宇平野を観察することも目的においた。

南北に長い大坪遺跡の層序を観察したところ、「正西道」推定地の条里界線以北は扇状地形の扇端部にあたり、流路を東西方向にとる大河や小河川が重なり合い、かつて意宇川が標高の低い北端付近を様々に流路を変化させて流れていた様子が確認できた。その中には古墳時代後期の土器や木製品を伴う時期が特定できる流路も存在した。

これに対して、南側では扇中央部に近い南方ほど標高が高くなっており、褐色シルトの比較的安定した基盤が存在した。この基盤上では弥生時代後期を中心とする溝状遺構3条を検出した。いずれも小さな溝のわりには多くの土器片を包含していたことから、周囲には弥生時代後期の大きな集落が存在していたことが推察された。しかし、溝の埋没状況、特に溝底面のレベルの高さから当時の生活面は現在より高い標高にあり、すでに失われている可能性が高いであろうと判断された。その他には、6世紀末頃の土器溜りと掘立柱建物を構成すると思われる疎らなピット群を検出したが、建物の時期特定までは至らなかった。

(江川 幸子)

田中谷遺跡Ⅲ区

田中谷遺跡は松江市法吉町地内に位置する。

田中谷という小さな谷と東西の低丘陵を含む広い遺跡である。住宅団地の建設に伴って試掘調査が行われ、確認された遺跡の大部分については島根県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施したが、市道建設予定地のⅢ区についてのみ、当事業団が発掘調査を実施した。

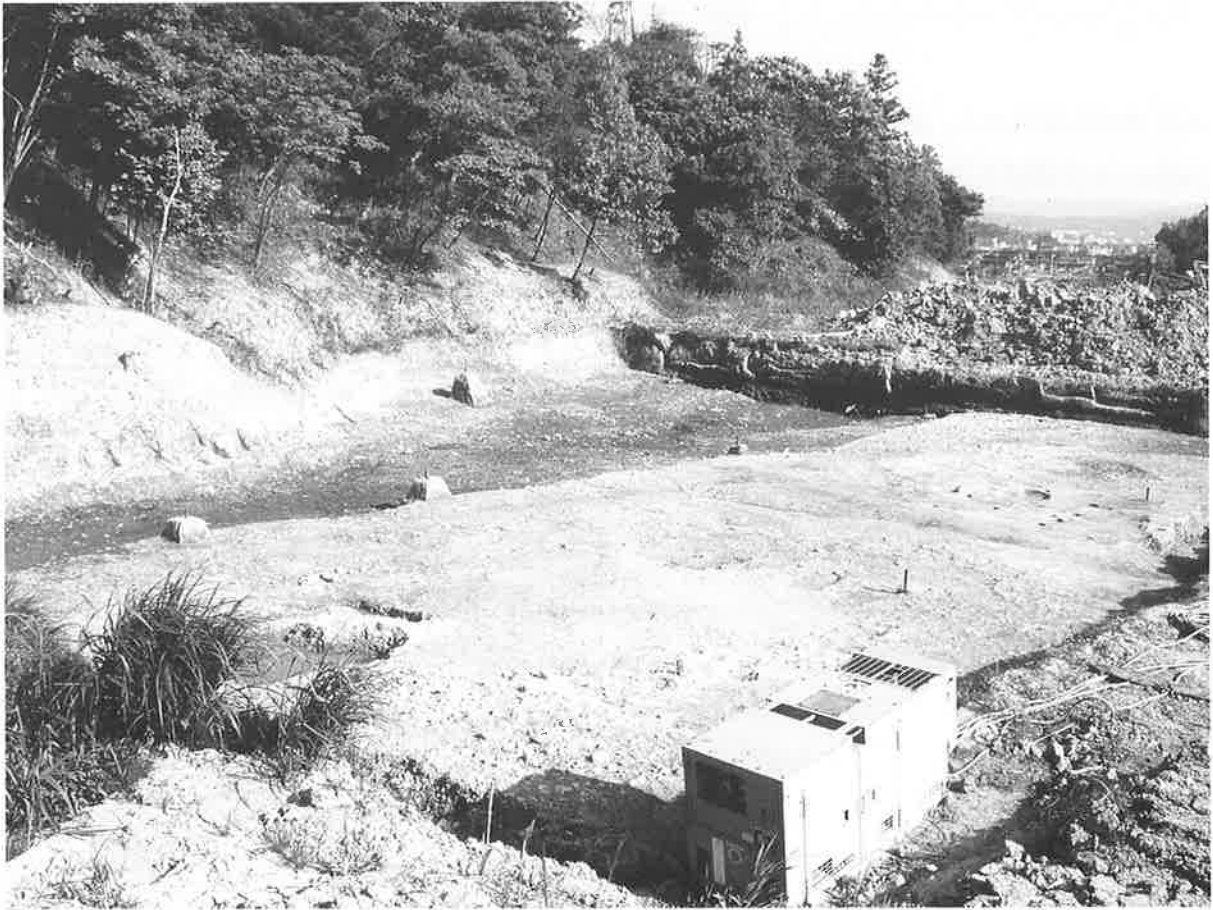
調査の結果、田中谷遺跡Ⅲ区は、谷の中流に位置する掘立柱建物と大量の遺物を包含する自然河道からなる遺跡であることがわかった。

掘立柱建物は2棟を復原することができた。そのほかにもピットが多く検出されたことから棟数はさらに多かったものと思われる。時期は弥生時代後期で、周辺に多量の炭や土器片を含む浅い土坑や溝を伴っていたことから、住居であった可能性が高い。遺構は調査区の南西角からも検出されたため、遺跡は周辺のさらに広い範囲に広がっているものと推察される。本調査区のように狭い谷底の中央付近に営まれた集落はめずらしいが、すぐ近くには谷川が流れていて生活の便は良かったであろう。しかし、遺構面が大小の礫に覆われて土器小片が散乱して出土した状況から、谷底という立地の悪さゆえ、最終的には谷全面を押し流すような鉄砲水にあって短期間で終焉をとげたものと考えられる。

谷の東端の自然河道は、平面的にはあたかも1本の川のように検出されたが、セクションを詳細に観察すると大小の川の流路が幾重にも切り合っている状況が確認できた。田中谷のような小さな谷を流れる川は通常では幅狭で水量も少ないものであるが、大量の降雨があった後には一時的に地面がえぐられて幅の広い川となり流路も変化していくことは想像に難くない。このような現象が降雨のたびに繰り返され、その痕跡が旧河道群のセクションとして現在に残っていると解釈してよいだろう。旧



自然河道 遺物出土状況



田中谷遺跡Ⅲ区 完掘状況

河道の堆積土中からは、比較的浅いレベルの層をはじめ深いレベルからも高い密度で土器片が出土した。また、しがらみ状の流木に混じって若干の木製品も出土した。土器の時期は弥生時代後期が中心で、調査区南端付近では古墳時代前期の土器も若干出土した。旧河道群の切り合い関係は非常に複雑で、残念ながら層序から土器や木製品の新旧を判断することはできなかった。河道群の東端の浅いレベルに限定して若干の須恵器片が出土したことから、残存する河道の中で一番新しい流路は調査区東端を流れており、その時期は古墳時代後期であったことがうかがえる。須恵器の出土場所は自然流路に限定され、谷中央の平坦地付近からは出土していないことから、その時期の遺構は東側丘陵上にあり、そこから遺物が転落して河道に埋没した可能性が高い。

田中谷遺跡Ⅲ区は、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物と遺構を中心とし、古墳時代後期の遺物も若干出土したが、その後の遺構と遺物は検出されなかった。遺構面や旧河道の上には遺物を包含しない灰色粘質土の厚い堆積層が見られたことから、この地は古墳時代後期を過ぎると、一時沼地状となった時期を経た後、現在のような豊富な谷水を利用されてきたのであろう。

田中谷遺跡のⅢ区以外の場所については、島根県埋蔵文化財調査センターがすでに発掘調査を終了して現在その成果がまとめられつつある。田中谷という小さな谷の歴史の変遷が明らかにされる日は遠くない。

(江川 幸子)

雲垣遺跡

雲垣遺跡発掘調査は、給油所建設用地の造成工事に伴い、平成12年9月6日から同年10月12日まで200㎡について調査を実施した。

雲垣遺跡は、松江市乃白町に所在する。松江市南西部を流れる忌部川下流の後背湿地に形成された、弥生時代中期の遺物を中心とする遺物包含地であった。周辺は緩やかな傾斜の沖積平野で水田地帯となっている。

調査の結果、遺構は確認されなかった。表土から地山面までの間には、約30層の土層が堆積し、地山面は脱色された灰白色の粘土で凸凹があり、流路状の地形を示すところもあった。上層（第1層～第4層）は、水田の耕作土と床土層であった。中層（第5層～第7層）は、凸凹が著しく布志名の岩盤に由来する砂岩～泥岩の小礫を多く含むこと、杵付田下駄の横棧、須恵器片、土師質土器片、などが出土していることから、古墳時代以降に客土された水田であった可能性は高い。しかし、畦畔や水路などの水田に伴う遺構は検出できなかったため、断定することはできない。田下駄横棧のC14年代はAD410～580（古墳時代中期～後期）であった。

下層（第8層～第30層）は、有機質の遺体を多く含んでおり、湿地状の沼のような場所だったことがわかる。この層からは、弥生中期後半の壺、甕、高坏等の土器類、木鏃、稲刈り田下駄他多くの木製品、凹石、砥石等が出土した。木鏃は模擬戦にかかわる祭祀遺物とされる武器形木製品の1種で出



雲垣遺跡より田和山を望む



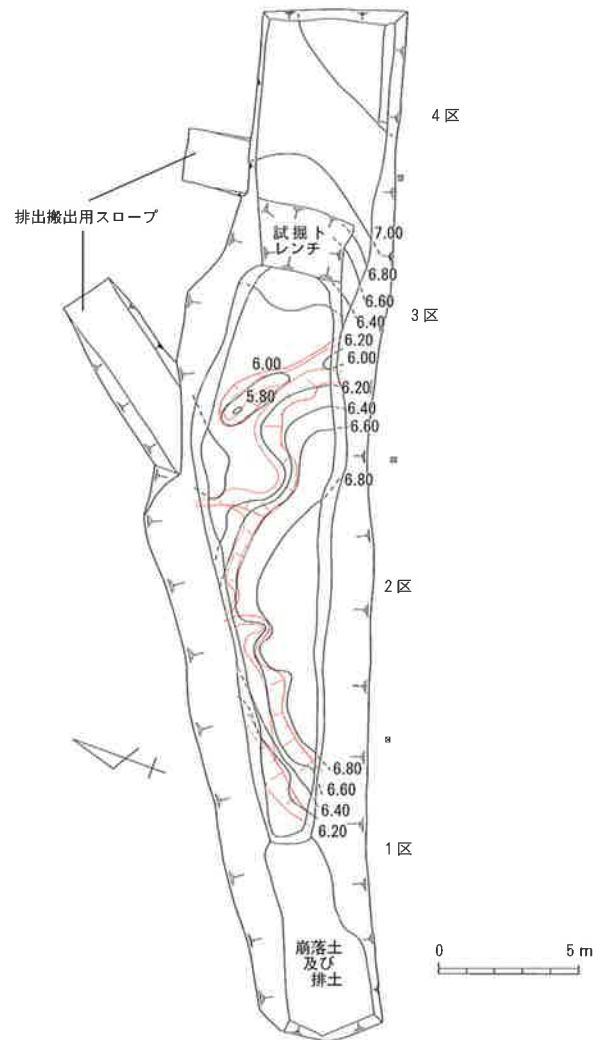
木 鋏

雲地方での出土例は少ない。C 14年代の結果は B C 350～310（弥生前期）及び B C 210～40（弥生中期）という二つの年代が出ている。稲刈り田下駄の C 14年代は B C 40～A D 120（弥生中期後半～後半前期）であった。土器類は弥生時代に限定され、前期の甕以外はすべて中期後半のものである。多くは広口壺で、朝顔状に大きく開く口縁部の端部と内面に凹線を数条施すことを特徴とする個体が大半であった。また、流路状地形の堆積土の下部からは、玉髄質のスクレーパー、黒曜石の小形石核が出土した。

今回の調査での土層や出土遺物、そして雲垣遺跡の西側丘陵にある福富 I 遺跡から出土した、鋏、杵付田下駄の縦杵などの木製品などから、この地域で水稲耕作が行われていたと思われる。雲垣遺跡周辺には多数の遺跡が存在しているが、集落の様相はあまりはっきりわかっていない。弥生前期から中期の人々の居住地は、おそらく本遺跡に近い丘陵の辺縁部に存在するのではないだろうか。

今回の調査は、狭い範囲ながら弥生時代の田和山周辺の様相の一端を垣間見ることのできる意義深いものであった。

（廣濱 貴子）



雲垣遺跡調査成果図

法吉遺跡

調査経緯

市道東春日生馬線の道路拡張工事の予定地が、法吉遺跡の範囲内であるため工事に先立って発掘調査を実施した。調査対象面積は1064㎡である。調査に際しては付近住民の通り道確保のため、8つの調査区に区分けして順次、調査を行うこととした。しかし用地買収の関係上、一部の調査区は調査を行なわなかった。実質的な調査面積は880㎡を測る。

調査に当たっては松江市教育委員会生涯学習課文化財室、及び松江市土木課と協議した結果、次の方法で調査を行うことになった。各調査区は法面を40度に設定し、掘削を行なうが、包含層までは重機で掘削し、包含層は人力で掘削する。これは、遺跡地の地盤が極めて軟弱であり、調査上での安全を確保するための必要上から決定したものである。

基本層序

調査区全体の基本層序は盛土及び旧耕土がGL-2mまで続き、その下から砂層、及び砂礫層が0.5~1mほど続く。その間に層厚約0.4mの有機質を多量に含んだ黒色砂層があり、同層より多量の木片、草葉、堅果類の自然遺体が検出された。砂層の下には黒色・白色の粘土層が厚く堆積していた(GL-2.5m以下)。この黒色粘土層から縄文土器の底部が1点出土しており、地山の検出はできなかった。しかし、安全を考慮した調査の都合上、この黒色粘土層をB層と称し、仮の地山として調査を終了した。

一方、調査区の南方へ行くにしたがって、盛土・旧耕土も浅くなり、有機質を多量に含んだ黒色砂層の堆積も未発達となる。そのため、調査地南端ではB層も層厚0.5mと比較的薄いため、調査終了に際してはB層も掘り下げ、地山の検出に勤めた。その結果、黒色粘土層の下から、茶褐色の砂質シルト(GL-2.2m)が認められた。調査地周辺で行なわれたこれまでのボーリング結果を参照すると、これら砂質シルト層が、固結度の緩い松江層砂岩の上層にあたり、(無遺物層という意味での)地山層に相当すると考えられる。

調査概要

今次調査地からは、調査地の前面にわたって広範に砂層の体積が認められた。これらの砂層からは遺物が極めて少ないものの、検出した遺物は全て縄文土器、または黒曜石のみであり、弥生以降の土器類はほぼ皆無である。縄文土器は全て細片ながら、その中には中期的な特徴を持つものが認められた。今次調査の成果からいえば、自然河道は縄文(中期)を上限として埋没したものと考えられる。自然流路からはドングリ集積地点(SX-F01)が確認できた。これにはドングリに混じって土器片2点が検出でき、遺構と判断した。

砂層には細砂、有機層、粗砂層が認められ、ある時期はゆっくりとした水の流れがあり、ある時期は湿地になり、ある時期は洪水状の突発的な流れになるなど、いくつかの変遷があったものと考えら

れる。周辺の地形を考慮すると、遺跡地周辺は上流の田中谷から続く谷状の地形にあり、これら検出した砂層（自然流路跡）もこういった谷地形の流れの一部を構成していたものと考えられる。このような地形（湿地～自然河道の谷地形）のもと、調査地付近には縄文人の活動があったことが想定できるのである。

（藤原 哲）



ドングリ集積状況

舎人遺跡

舎人遺跡は国屋町・黒田町にまたがる丘陵に位置する。本遺跡は民間業者が住宅団地の造成工事を計画した際に、分布調査で頂上部に広い平坦面と東西南北の四方向の斜面に加工段を持つ城跡と思われる。歴史的な環境は南側に毛利元就が白鹿城攻めの際に陣城を築いた荒隈城、真東に現在松江城のある亀田山にあったとされる末次城がある。調査は平成12年11月～平成13年4月、約6ヶ月間を要した。

調査の結果、遺構はいくつか確認されたが、明確に城跡に結びつく遺構は確認できなかった。頂上部は東西約15m、南北約35mに平坦面を持ち、中央からやや北側寄りに加工段と思われる遺構が検出された。平面形は逆コの字状を呈し、全長約7.9m、高低差は約30cmを測り、一部は深さ約10cmの溝状になっている。おそらく頂上部平坦面を2つに区切るものと考えられるが、時期など詳細については遺物が出土しなかったために不明である。

頂上部の南側は直径10～15cm程度の丸石が大量に散乱していた。これらの石は丘陵にあったものではなく、他の場所から持ち込んだ石と思われる。近所の方に話を伺うと、戦前まで祠のようなものがあったということから、この祠に関係した石ではないだろうか。

斜面の加工段に関しては、南北両側が以前の住宅団地の擁壁のために削平されており正確にはわからないが、東西両側はほとんど残っていたため期待がもたれた。しかし調査の結果、斜面上部には旧表土と盛土が残っているところもあるため、後世に畑で加工段の平坦面を拡張して再利用し、当初の原型をとどめていないものと思われる。

南側の加工段の平坦面からは長方形の土壇が検出された。規模は180×52×140cmを測る。埋葬施設ではないかと考えられるが、遺物が出土しなかったため詳細については不明である。

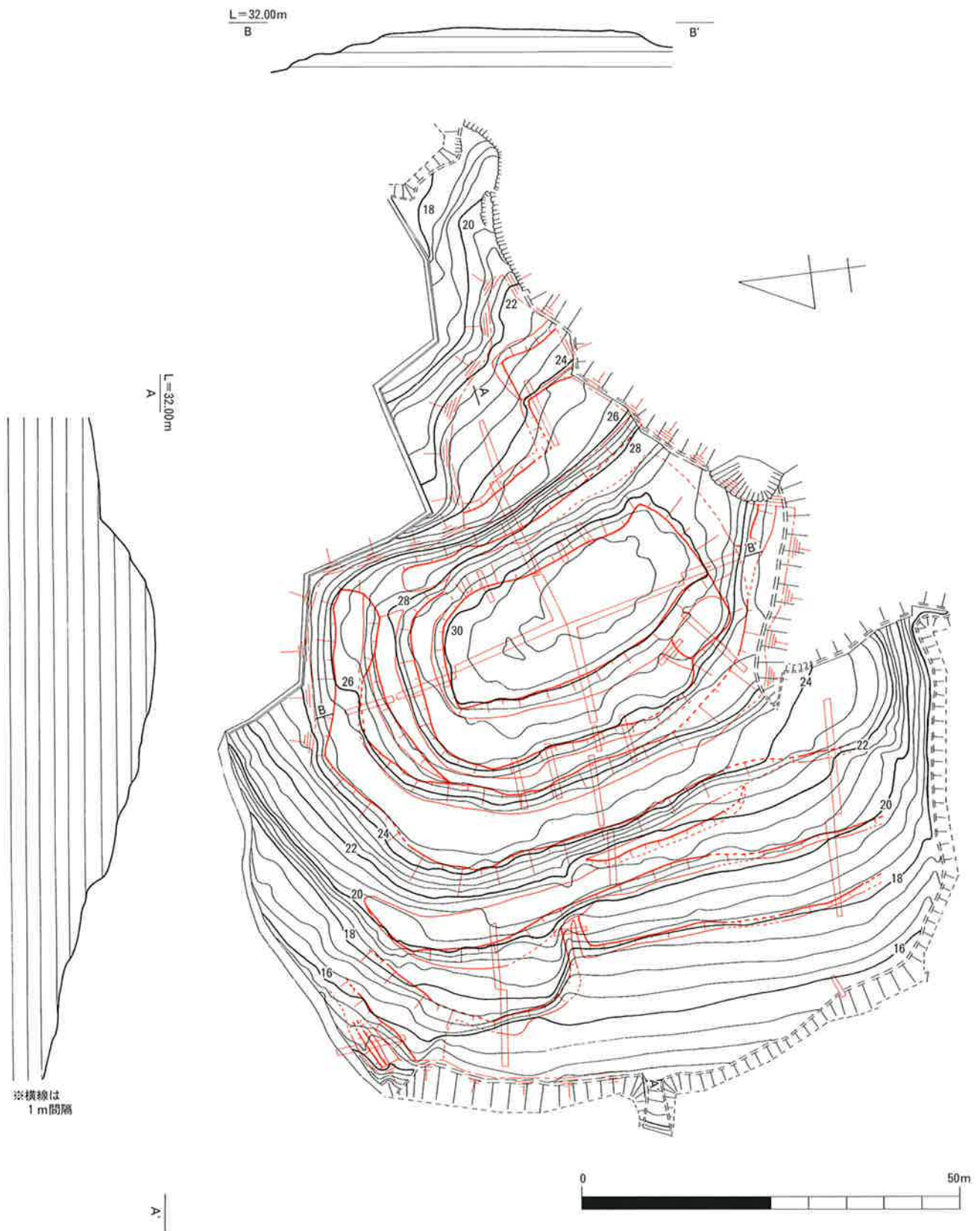
東側斜面では斜面の際全体に深さ5～60cmの溝が検出された。埋土中からは近代と思われる陶器の壺が出土し、埋土には表土の黒色土が入り込んでいるため、最近埋没したものと思われる。

遺物はほとんどが近・現代のものばかりだったが、頂上部付近から土師質土器（かわらけ）の破片が数片出土した。これらのかかわらけは底部に回転糸切り痕を持つものや手捏ねのもの両方が出土した。これら以外には西側平坦面から底部に回転糸切り痕を持つ須恵器の坏が出土した。

本遺跡で伐採された木の切株は年輪が50本前後あり、畑仕事など人の手が入らなくなってから50年ぐらい経ったものと思われ、それまでは城跡の加工段を利用して畑に使っていたと思われる。

この付近は位置的にも歴史的にも城跡があっても不思議ではない。1562年（永禄5年）に元就が尼子攻めの本陣として洗合山に城を築き（荒隈城）、その後配下の武将も丘陵伝いに陣屋を築いており、荒隈城の城域がかなりの広範囲に及んでいる。そのため本遺跡もその範囲の中にあった可能性が高い。また1569～70年（永禄12年～元亀元年）の尼子復興戦の際は山中鹿之助が真山を本拠とし、布部山の合戦において毛利軍に大敗した後、末次城付近に陣を置いて防衛線を引いたことから、そのときの防衛線の中にあつた可能性もある。いずれにしても推測の域を出ないわけだが周辺の城跡含めて再検討をしてみたい。

（石川 崇）



調査前地形測量及びトレンチ設定図

田和山遺跡群

田和山遺跡群は、松江市乃白町地内の小高い丘陵地に位置する弥生前期末～中期の環壕遺跡を主とした遺跡群である。

近隣の遺跡としては、本丘陵地内南方に前方後円墳の田和山1号墳、本丘陵の北東に派生する丘陵に弥生中期頃の土壙墓が多数見つかった友田遺跡、本丘陵北西の現松江農林高校付近に弥生土器が出土している欠田遺跡・門田遺跡の存在が知られている。

本概要は、平成12年度に調査した環壕の途切れ部・地滑り部、周辺の住居跡等の調査成果を中心に以下のとおり記すものである。

1. 環壕途切れ部

本調査部分は、環壕遺跡南東側の第3環壕が途切れている所である。当初からこの場所に環壕が造られていなかったとすれば、まだ確認されていない山頂部への通路もしくは、これに付随する施設が存在する可能性が考えられるものとして、この区間(約28m)について調査をおこなった。

調査の結果、遺構は検出されなかったが、北東側において幅約17mにおよんで第2環壕造成時の旧表土が、約50～60cmほど地中下方に落ちている地滑り跡を確認することができた。

この下方に落ちている旧表土面は、滑落の小亀裂によってできる波状の形状を呈しており、地滑りの状況を明瞭に示すものであった。



田和山遺跡群 遺構配置図

まとめ

この部分の調査では、通路・柵等の遺構を確認することはできず、故に何故第3環壕がこの部分に存在していないのか、疑問が残るものとなった。当時この場所に存在していた第3環壕が地滑りによって抜け落ち、消失してしまったという仮説も考えられるが、その根拠を得ることは現地形における調査では不可能であった。

この調査区に第3環壕が存在していたのか否かの問題は、この環壕遺跡の性格を解明するうえで重要な要素の一つになり得るものである。今後慎重な検討が必要な部分であると考えられる。

2. 環壕地滑り部

本部分は、平成11年度に第2・3環壕が地滑りを起こしていることが確認された環壕遺跡東側部分の詳細な調査をおこなったものである。

調査の結果、第2環壕の底部の痕跡と、第3環壕が斜面下方に滑り落ちている痕跡を検出した。この滑り落ちた第3環壕は、比較的残りが良く、土層断面でもその形が明瞭に現れている状況であった。

また、この滑り落ちた第3環壕は、滑り面に従い滑り落ちた距離2.8mを原位置に復元すると、現存する北側の第3環壕と、南側尾根上の第3環壕とほぼ同じラインに入ることが確認されている。

この他にこの調査部分では地盤が軟弱な為か、地滑りが重複して起こっていたことが確認されている。このような環壕部分の地滑りは他の場所でも起こっており、北側の第1・2・3環壕の一部で段状に斜面下方に向かって壕が滑り落ちた痕跡が確認されている。

まとめ

以上の調査結果より、この部分の第2・3環壕は、環壕遺跡造成当時存在していたものが地滑りによって崩落してしまったと判断され、先述の「環壕途切れ部」の問題を除き、第1・2・3環壕は本来、山頂部を全周させていたということが推測でき得るものである。



第3環壕地滑り状況（土層断面写真）

3. 周辺住居跡

本年度の調査では、環壕外側西斜面（C遺跡東側）・環壕地滑り部外側斜面・環壕外側南東斜面（B遺跡北・南斜面）・南丘陵東側斜面（A遺跡北斜面）において、古墳時代～平安時代の方形住居跡1軒、掘立柱建物跡・加工段（掘立柱建物跡）22棟を確認した。

各調査区の遺構等の概略は以下のとおりである。

環壕外側西斜面（C遺跡東側）

本調査区は、平成9年度に調査したC遺跡の東側に位置し、周辺からは弥生中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡、古墳中期の竪穴住居跡が前調査で確認されている所である。

本年度の調査では、古墳時代中期の加工段（掘立柱建物跡）1棟・古墳時代後期の加工段（掘立柱建物跡）3棟・焼土遺構1所と奈良～平安時代の方形住居跡1軒を検出した。

加工段（掘立柱建物跡）は、床面が一部流失してしまっているものが多く、全容を確認することはできなかったが、いずれも柱穴を伴っていることから掘立柱建物が存在していたものと思われる。遺物は、須恵器の蓋坏・土師器の高坏等が出土している。

方形住居跡は、平成9年度に調査した弥生中期の竪穴住居跡に隣接する場所で検出した。検出状況から、弥生中期の竪穴住居の後に造られたものと思われる。遺物は、須恵器の甕片・高台付坏片が出土している。

環壕地滑り部外側斜面・環壕外側南東斜面（B遺跡北・南斜面）

本調査区は、先述の環壕地滑り部の外側斜面と平成9年度に調査したB遺跡の北・南斜面にあたる場所である。

本年度の調査では、時期不明の掘立柱建物跡1棟・古墳時代中期の掘立柱建物跡1棟・平安後期以降の加工段（掘立柱建物跡）2棟を検出した。

時期不明の掘立柱建物跡は、1間×1間で環壕地滑り部外側斜面において検出した。遺物は遺構上及びその周辺においても認められなかった。

古墳中期の掘立柱建物跡はB遺跡の南斜面において、溝・焼土跡・多数の柱穴を伴う形で検出した。遺物は、土師器の高坏・甕片が出土している。

平安後期以降の加工段（掘立柱建物跡）は、B遺跡の北斜面で1棟、南斜面で1棟検出した。

このうち、B遺跡の北斜面の加工段（掘立柱建物跡）からは、多数の柱穴を検出しており、何棟かの建物が重複しているものと考えられる。遺物は、いずれも土師質土器片が出土している。



環壕外側南東斜面（B遺跡北）掘立柱建物跡

南丘陵東側斜面（A遺跡北斜面）

本調査区は、平成9年度に調査したA遺跡の北斜面にあたる場所である。

本年度の調査では、古墳時代後期の加工段（掘立柱建物跡）5棟・奈良時代～平安時代の加工段（掘立柱建物跡）2棟・時期不明の加工段（掘立柱建物跡）7棟を検出した。

これら加工段（掘立柱建物跡）は、床面が一部流失してしまっているものが多く、全容を確認することが難しいものもあったが、いずれも柱穴を伴っていることから掘立柱建物が存在していたものと考えられる。遺物は、須恵器の坏蓋・坏身・高台坏皿等が出土している。

まとめ

今回の南丘陵を中心としたこの調査では、多数の住居跡を検出することができ、貴重な資料が得られたものと思われる。なかでも興味を引くのは、古墳時代以降の遺構は多く確認されたが、弥生時代の遺構は皆無ということである。これにより、前年度調査した環壕遺跡東側斜面から南丘陵尾根にかけては弥生時代の遺構が存在していないということになるのである。

このことから、何故この環壕遺跡東側一帯から南丘陵尾根にかけては環壕遺跡と同時期に使用されなかったのか、今後田和山遺跡を解明していくにあたり、また一つ大きな検討課題を課せられたものと考えている。

（落合 昭久）



南丘陵東側斜面（A遺跡北斜面）掘立柱建物跡



田和山遺跡群全景